

## 同窓生として最近思うこと

観一高同窓会京阪神支部 会長 観一・10回 片桐 陽

(昭和34年卒)



皆様におかれましては、お健やかに過ごしのこととお喜び申し上げます。  
平素は同窓会活動につきまして格別のご理解とご協力を頂いておりますことを、この場をお借りしまして厚くお礼申し上げます。

さて、本日は観一卒業来60年近く故郷香川県を離れて過ごしてきた者が、最近思っていることの一端を申し述べ、ご挨拶とさせて頂きたいと思っております。

先ごろ、「瀬戸大橋開通30年」と大きく報道されていきました。高松発の連絡船に乗船するたびに、故郷を離れるというある感慨を抱いた若き日のことが、遠い昔のように思い起こされました。あの時々の年月は、我が国にとりましては高度経済成長、バブル経済の崩壊、リーマンショック等々、激動の時代でもありました。この間、銀行という世界に身を置き、この世の栄枯盛衰、人の心の悲喜交々を垣間見えました。そして、今思うことは生まれ育った故郷への感謝の数々であります。特に、人情豊かな環境に恵まれた観音寺一高という伝統校で、人としての生き方を教えられたことへの感謝であります。

田舎育ちの世間知らずの若者が厳しい競争社会で生きる時、艱難辛苦を少なからず経験してきたようにも思うので

すが、そのような時いつも心の支えとなったのは観一で学んだ日々の事でした。世の矛盾に怒りを覚え失意の淵に立たされた時には決して希望を捨ててはならないと心を奮い立たせ、自身の無能さに自信を喪失しそうになった時にはこのような者でも自分にしかできない役割使命がある筈だと自らを鼓舞し、安っぽい正義感が打ちのめされ世の荒波に翻弄された時には決して人間としての矜持を失ってはならないと勇気が与えられたこと、思うに、若き日に観一で学んだことが人生の応援歌となり通奏低音となってきたように思うのです。現在、私は大阪の地域金融機関である信用金庫で働き、地域発展のために何が出来るかと考え、そのために私が出来ることを為したいと思っるところです。「置かれたところで咲きなさい」という言葉があります。観一精神を学んだ者が今置かれた場所でその精神を活かしきることが、若き日に薫陶を受けた方々に報いることになるものと信じています。

いまや、我が国は高度経済成長期から成熟社会へと移行し、現下の国家的課題は、少子高齢化に伴う人口減少問題、それに伴う地域格差の拡大への対応であります。香川県はじめ四国においても人口減少が深刻な問題となっております。この課題解決のため、この地域の出身者の一人として私の為すべきことは何かと考えているところです。瀬戸大橋をはじめ3本の大橋で本土と四国は結ばれる時代となり、近畿一円の経済圏として四国を位置付けるべきではないかと考え、その具体策を各方面に訴えています。例えば、観光産業振興を各界有識者に提案しているところです。自然災害が少なく、豊かで温暖な自然に恵まれていること、金毘羅山はじめ観光資源に恵まれていること、お遍路さんで培われた人情豊かなおもてなし文化があること等、香川県をはじめ四国には固有の財産があり、この資源を国内はもとより海外に広く喧伝し多くの人を呼び込むことが出来れば、香川県はもとより四国の活性化に繋がるのではないかと思っています。そして、人口減少、地域格差拡大というハンディーを大きなチャンスに変えることが出来る、いや、変

えるために何を為すべきかが、卒業生の一人として問われているように思うのです。

若き日を観一で学んだ者としては、いつまでも「燃ゆる希望」、「高き矜持」、「重き使命」を心に刻みつつ、残された日々を過ごしたいものと思つていくところでは。